

池田觀
纂述

修身小學讀本

初等科第一級
卷六

1101
76
6

明治十五年五月再版

從四程福羽美靜閱 三尾重定刪定

東澤師範 那珂通世校正 池田觀纂述

修身小學讀本

版權所有

東崖堂刊行

緒言

此卷を第一に君徳を尊崇し、國憲を敬戴し、奢侈を戒め、財用を節し、慈仁誠實以て、恩恵を人に施し等、且偉業篤行の模範も為すべし。談話を雜載し、児童として、通常一般に義務と盡さるるを本旨とし、初等學科第一級生の用に供するものとす。

修身小學讀本卷之六

福羽美静 閱 三尾重定 刪定

那珂通世 校正 池田 觀纂 纂述

第十五章 君徳公益

吾れ人此の世に生命を保つと成得
るを君徳に渥きふ因きり。

君とは畏くも我の

天皇陛下と稱し奉るなり。

天皇を。天道を補佐し。國內人民の。各其業に安堵して。子孫と撫で育はしめんが為め。官省院府縣等を置き。指令と下し。布告を傳へ。人民の便利或謀り。妨害を除き。給はんと。日夜に睿慮を悩まし給ふ。鴻大無邊の仁惠を。人皆之を奉戴し。善ふ進み業と勵む。國家に裨益と興さんことを。幼穉の時

より。怠慢ふく。心掛くづき。ことをなすらびや。

名取彦兵衛を。甲府の山田町に者まて。紙を鬻ぐと業とせり。一日慨然として。我が國蠶糸の製粗惡にし。國産の聲價と墮し。蠶業に失敗を招く或歎き。從來此商業を廢し。心を製糸の途不委ね思ひを器械の製造す。凝らし。始てひ

とつれ器械を創
造して試験をすに
いまだ精好ふら
ず。こまごまの為ふれ
なくれ金錢を費
せども毫も厭は
ず。日夜に心思を
悩まして再三再四



製造に工夫を凝すといへども。なほ精
密の地ふ至らむ。其の改造するに。そふ
げなく。損害をふし。殆家産を傾けんと
す。この事比隣ふ傳へ聞つゝ。或ハ痴と
呼ひひ狂とそ志りて。其迂拙と笑は
ざるも。れふし。こくに於て。家族の者も。
彦兵衛が。産と失ひ。家を破る。或憂へ。志
なく。舊業に復せんことと。勧め戒む

といつども。猶志を翻へさびすましく
こき我講究し。諫を用ねざるを以て。親
戚を絶交し。手代を暇と乞ふふ至れり。
然るに庚午れとしに及び。蒸氣を以て。
製糸と乾をふとと。工夫しえたり。これ
よる製糸極めて精美にふりて。價ひも
また進歩せり。是に於て猶一層工夫を凝
し。種々の器械を製して之を使用す。絲質益精

良ふ至れり。こき我横濱へ輸出せしに。
外國人賞美して。價格も又前日に倍せり。壬
申のとしふ至り。煮糸と清水をて洗ひ。
粹に移すこと我工夫せしよる。糸ふ光
澤とまじ。精工を極めたり。數年の刻苦
心力を一途ふ盡し。今日かく此如く。精
妙の結果を得たるは。兼て公布ありし。
朝昔にも適ひて。奇特の至り。感賞する

にたまりとて。金若干と賜へり。とぞ。
國法は。皆人民を。安穩あらしめん。つた
るふ。設けられたるものにして。公正純
善なるも。れふまじ。必之ふ依頼して。常
に之を畏き尊と。決して違犯をまど。死
なり。

國法と犯を。勿論。妄に官吏を。輕蔑を
は癖あるものは。之と頑固の陋民と。以

ふ。純善の幼穉等。必これ惡癖。浸染を
り。こと勿れ。

第十六章 節儉

節儉とは。物ごとくに程合を。つけ。費とは
よき。奢らぬを。いふ。

幼穉の時。何事を。父母に。依頼し。唯其
命。不従ふものなき。別。不節儉の。あ
方も。なき。様。あれども。父母。れ。家を。治む

るに多。必多少の辛苦を嘗め。節儉と以て維持せらるるもれなきを。兒童として。其心減心として。筆墨紙等を濫ふ費し。書物其他に物品を損ひ毀らぬやうに。心掛くべし。

或る日。曜祭日等ふて。父母師傳に。物見遊山を允さるる時。人の麗衣と着たるを見て。我も造り賜されど。父母に

迫る癖あるもれあり。何れの父母にして。我が子女に。美麗なる衣服を着せんと。思はざるをふく。日夜ふ心と碎けど。其家の貧富により。皆夫々の心積りの何れもれなきを。必父母の着せ與へらるるものと。喜び戴きて。敢て其他と願はざるを。小児と雖。一家の為めに。節儉と助くる。一端なるなり。

一粒の米。一寸の紙。ふても大切にすべし。米粒寸紙を粗末にせぬを。決して吝嗇小量ふるに非ず。徒ら夫物を暴殄するの恐れあるを。古來世に大功業と建る程の人。必^に儉素を本として。決して濫用する事なき。郭子儀といふ一人を。安史に亂る。戡ち。唐の宗社を中興せし。大功臣ふて。汾陽王ふ封せられ。其の身富貴にあらず。はきどもの年

中外より来る。書牘の上。包れ。紙を綴りて。小冊となる。日々に記録の用にせられ。王曾といふ一人を。強敵に下謂と伐ち。仁宗の太平を開きたる。大勲ある。豪傑なる。とも。書簡の末に。餘白と集めて。人不贈る物とふたりたりと。下り。れ。特ふ無用の費を厭ひ。儉素の徳を養ひて。天物と愛するの龜鑑なり。

下野の鹿沼の郷に老人あり。終身其の門
前此小流不_レ流_レる_レみを作り。流を止る
朽木枯草を集め。家内湯浴の用に供し。
其家つひ_レ洪福被_レ談_レし。其子不_レ博學能
文の人を生_レたり。又武藏此本莊不_レ
老人あり。門前の馬糞採_レて懈_レら_レず。是非
常の幸福を起_レし。子孫此榮昌を来_レせりと
也。

諺に塵積りて山成なると謂_レたり。小兒
等單_レ不_レ。将来の榮華を求めんと欲せむ。
必勤儉。績密にして。輕躁粗豪の行_レ
を為_レま_レこと勿_レれ。

第十七章 慈仁 誠實 恩惠

子貢孔子に問ふて曰く一言
不_レして終身之を行ふづま_レ者何_レやと。
孔子之に對へて。其れ怒_レるかといへ

り。怒とを。我が心に欲せぬ者。ハ。人ふも施さぬことを云。これを。人の患難。苦痛を見ては。其人れ心と思ひや。了て。心或盡。一カ。の及ふ限りを。救ひ助けざる。づ。う。自叙論に。人れ徳行を。天道を。敬畏を。懐の心と。人類を愛重するの心との。聚まりて。成まる者なるに。此徳行を修むるに。目的ふく。て。たぐ才能と。

重んぶること。我習ふ。風俗を成す時を。人心れ。壊敗。世道の衰退。是より甚し。死は。な。と説けり。
人の殊に。慎むべき。詐譎。高慢。妬羨。危疑。等なる。偽心ある者。其の巧言を以。一時人の信憑を得る。雖。その偽漸く。露見して。竟ふ唾棄せらる。慢心ある者。人を蔑視。志て。禮を加。必人ふ。譏笑せらる。

妬心ある者ハ。常に人の上ふ立んまるとを欲せ。故に人の美事を聞けハ。不平と懐き。已きふ如き事ハ。説話をきき終ハ。欣然たり。何そ人ふ加損を要せんや。疑心ある者ハ。人の言を出た毎に反覆思繹。我が何事とてか譏り笑ふや。人と怨を結ぶ事と。常ふ此ふ萌生ものなるを。

人の言行は唯誠の一字あり貫くべし。

誠とは實心にして。詐飾のなきことあり人々何等ふ表面を。美善に見せんとも。似せものなきべ。必永續して。之を遂ぐはこと能はず。

譬一を。劇場にて。俳優の持つる刀は。閃々人を射るとも。物と裁截せしること能はず。絹紙と以て。造りたる花を。美麗ありとも。香氣人を喜ばしむは。不足らざ

るが如し。

平常に之。其君父兄を敬愛をほ如く。見ゆとも。誠なき人。非常危急の場に臨みて。却つて操と取り失ふもれなり。されを。幼児の學問をせむにも。教師に教を誠實に受けて。一心に覺えんことを志さば。一事一言たりとも。他の數事に働きて。人を三年と費を業も。我の一

年にて成就せむに至るべし。

古語云。精神一たび到らば。何事も成らざらん。と謂ひ。精神とを。たゞ誠の一字不在りと知るべし。

熊澤了介云。幼名茂治郎八と云ひ。京都五條比生をたり。甫めて十六才にして。備前侯に仕へ。眷遇を受けし。少年にて。仕官せば。遂に學業と成就せむこと

能はざるとて。斷然意を決して。近江の桐原といふ所へ隠れ。書と讀み。其義を研究せむること。歳餘に。又京師に赴き。良師を求む。其同宿の人語りて曰く。余曩に主命と以て。金二百圓を懐に。旅行せしとき。途上驛馬に乗る。其金を鞍に繫ぎしと忘き。宿へ投じ。困頓して睡りふ就く。半夜初めて覺めて。金と遺きし

ことを覺り。痛心措く能はざり。千萬思慮を盡し。之と求むるの術なく。愀然として悲歎せり。時に人あり。門戸を叩くこと急なり。頃く何りて。戸主一客と伴ひて。我の寢室へ來るを見まはす。晝間備後せし馬夫某あり。何を家に歸り。馬の鞍を解とふ及びて。之を得たり。これ必足下の遺る所あらん。故へ來りて還

呈よといひて。我
が遺れたる金囊
を出さ。余驚喜措
く所を知らず。腰
纏せる金十六圓
と以て。之に謝せ
んとす。馬夫受け
どして曰く。足下



の物を足下に付を何ぞ謝と要せん。唯
夜を冒して来る。其賃二百文を得。足
れりと。決して受くづき色ふし。乃其半
を減じて。八圓とに。然きども亦受けむ。
漸く減じて。僅に二方金に至る。猶受け
ば。て曰く。我を賤役と以て口を糊す。
豈利と思はざらんや。然るに我が郷中
に。中江先生と云つる有り。わを其言を

聞くふ。誠正以て其身を修め。貧賤以て
枉むること勿れといひ。今足下の金
を以て。我が利とふさを。則此の心と欺
くなると言ひ畢つて去れりと語をり。
了々傾き聴くこと良久。乃謂へらく。
馬夫をこそ一郷の鄙人のみ。然るに其
廉潔斯れ如きは。必教育に致す所あり。
其中江先生こそ。吾が良師なれとて。往

きて業を受けんこと我請ふ。先生辭を
りて人の師たるふ足らざると以てす。
了介益請ふて止まば。遂ふ其廡下に在
る六や。二晝夜に及びけれを。先生は
母之を憐み。先生不謂ひけらく。客遠方
より来り。懇情此の如く切ふ。も一之
に習ふ所を傳ふとも。誰か汝が好むて
人の師と為ると謂はんやと。是に於て。

初めて接容し。其學業と成就し。世に蕃
山先生とて博識多才を以て稱せられ。
復岡山ふ於て食祿三千石或受くる事
至きり。

元末の高麗吉再々字を再父と以ひ善
山海平此人ふり。性穎悟ふして清操あ
り。幼ふして好て書と讀む。笈を負て師
或尋ね遐險と憚らざ。年十四朴實とい

ふ人に就き論語孟子を受け。又父ふ隨
ひ松都ふ至り。牧隱圃隱陽村等の諸先
生の門に遊ひ始て理學の至論と聞き。
父母ふ事つて孝を盡し。庶母に對し
て敬茂致。且不慈ふる者として慈な
らしめ。下を率るふ禮を以てし。奢驕を
變して。儉謹と為る。登第して。門下注書
に官ふ至る。洪武庚午の年。國に將ふ亡

んとすると知り。辭するに母の老たる
残以て官を棄て。退て鳳溪に居る官志
むく之を召せとも應ぜざ。舊君れたる
方喪をるまど三年醯菓を食はず。遠近
の學徒四方より集り。相與に經傳を討
論し。入てを孝出ては恭。樂み以て憂を
忘る。明の太宗に朝。太常博士の官を授
はを以て徵さるとも。再ひ筭と上り。

自ら二姓に事つごるに志を陳べたり。
上其の節義と嘉し。優禮して之と遣れ
り。それ家ふ居る。淡泊安静にして。財を
輕し。義と重し。室廬蕭然として。生理屢
空し。けまごも。怡然として。意と為さず。
年五十七とへるころ。師陽村に卒するを聞
き。哭泣して曰く。民を父師君の三を以
て。人と為るふり。父なくんを生むるふ

と師ふくんバ。教ゆるなく。君あくんを。
養ふなく。古者之に事ふる一れ如しと。
乃心喪を行ふこと三年。其の後朴公實
卒也。又心喪を行ふ二年に及り。その老て
禮を勤むる此の如し。一世に學者。其れ
徳と稱賛せざるなきと。かや。

羽前國平山村に青木善七といふ者
あり。父をも善七といひつり。天保四年と

大に飢ゆ。父善七。村内の者に米錢と施し。
危急を救ひし事。大かとなり。その時
今の善七は十七歳。まじ丁年にも至らざる。
者なり。かど。性質物と。いはまむ心深
く。父れ訓をよく守りて。月ごとに。父よ
り貰ひ得る處の小遣ひの錢と。猥り不費
さば。積と貯たきて。飢民を助けし事と
もあまて。少年にを珍しき者なりと。其

頃をぶぐり。稱譽せり。その後父没して。獨老母の在りける。病がち不暮すまじり。朝夕は食事と始め。起臥に至るまで。まづ我がまゝかは事のとれぬのれども。善七母の詞をかゝるとまた。意不さをたちて。とを扱ひしほどに。母いたくよろこびく。母子の間殊に睦すくを暮しけるを。舊藩の時よ

り。撰をれて。村役をつとめし。引續き維新の後。副戸長不補せられけり。ことに依て。殊更不黽勵。孝悌とをく免。農業をほやめ。貧窮と恤み。孤獨を救ひ。一村の者を我子の如く思ひし。それ職にかゝはん事とのみ。一途に心掛けし。を。村の者も其徳化り服して。父母の如く。仰ぎ慕ひ。互にむはす。ト。公

事訴訟ふと。これこそ者もなく一村靜穩な
る事。みな善七の精誠の致すと云ふるふ
り。善七常小村内の利益にならん事と
勘 づく。慶應二年ふ。金八十兩をえて。
村役所に。あづけたる。裁潤農金とふは
け。利子を昇志して。貧窮の者にかゝ與
へ。農業を勧め課せしむ。それよしつひ
に領主に聞えく。褒賞せらるる。かく

て其の金。とをうりまゝ。數百兩に
も及びし程に。宿意のぶとく。貧民勸農の
資本となす。一村の潤ひ。おやうたふ
らびあるとど。又養蠶ハ。人家第一此
産業ふれむ。村民を率ぬく。野川の傍の
廢地と起し。桑と植させしより。年ごと
に桑田ひらけて。今猶肌寒と免るゝに
至りしを。全く其のいさをふり。

おれよりされ。村人彌惣といふ者。租税の収納にくるふみいと。金十七兩外よりかきて。事ふくをさめさせしに。其の後彌惣いとも困窮にならざりしを。これ十七兩とて。彌惣ふつのはして。金主へをれのれ返済にねよびけり。また村人卯右衛門といふ者の居宅。破損に及びしが。取つくろふ事もえせざり。銭憫て。金

三兩をめぐみて。雨露と志れがせけり。また村人與左衛門といふ者の。収租堪むを。あはききみ。米貳石五斗と納めしのはし。後々のたつきとも。おんこ後よ何つかひしけり。けり。さるを善士。をとり有餘ある。富人ふらねを。その施せる所。いとねやしといふもの。何らぞいふ。安政六年より。明治五年まで。十四年

間に。鰥寡孤獨を救へる事。上件ふ舉し
彌惣。卯右衛門。與左衛門。此三人と除く
の外。米貳十五俵。錢七百貫文に及びり。
殊ふ潤農金と。桑田との兩条を。今に至
て。村民の潤益とふ。皆其恩波に浴
けり。是に於て。村内の風俗も。たのづか
ら。淳朴にかり。各其徳を表せんとして。醵
集して。一の紀念碑を建てけり。とぞ。

其二 報恩

家ふ長あつて。其の事務を総理を
する。猶國ふ君あつて。其の政治を
統御し玉ふが如し。家長國君。其地
を異ふと雖。下ふ立て其慈ふ浴
せり。此一途ふ至つて。其差有る
ふやなし。苟も之の愛撫を被る者。

亦之を報せざるをうらむ。父母ハ我きと育養して人となり。嚴師ハ我きと誘導して人なり。人たる所以を教へ。國君ハ我を保護して。行ふ處を盡さむ。恩の殊別たる多し。雖就中此の三恩ハ人世に在て。無上無邊の鴻恩なり。謹ん

て。誤き失ふと勿れ。人非常の窮厄に値ひ。其救濟の思ふ感さるハ。論を俟ま。雖日往き月來つて。身漸く立ち。意漸く安まふ。至きハ。當時の情感稍減して。動もまれば。其恩義の人を以て。路人の看を爲さふ至る。是何等の疎情

そや禽獸をら恩義の爲ふ。其の身
力を竭きあり。人として之なきハ
豈愧なきの。至りあらば也。

大阪阿波座中通りに喜多三郎兵
衛といふ商家あり。原富有の者な
り。この年と逐ふて零落し。且戸主
老病ふ罹り。益貧苦を重ねしより。

衣類其他諸器財も。悉皆典賣し
て残さなく。殆困苦と極めあり。然
るに。此の家ふ古く仕へたる下婢
ぬおといへる者。深く主家の落魄
を歎き。其家魚市場ふ近きと以て。
晝ハ出て魚を賣り。夜ハ燈下ふ縫
績し。一身の艱苦を厭え。幼兒と

養ひ。病主と慰め。看護懈らばと雖。鑿藥其驗をく。竟ふ遊逝たりけ
れハ。葬儀より。忌日の祭典ふ至る
才て。皆ぬる一人の周旋ふて之哉
施行し。幼主をいと懇切ふ撫育し。
學藝習字裁縫の事ふ至り。何れ
と形く。心と盡して。教へ導きたり。

ぬる時ふ。年七十ふ餘りけれハ。親
戚の者。其老衰と憐み。歸郷して。殘
年を安んずべしと。屢之と勸奨す
と雖。主家の相續極らぎ体限りハ。
誓つて家ふ還らばとて肯まは
茲ふ又此家ふ仕まられたる。又兵衛
といふ者あり。先年故ありて。本國

仙身小異言六 卷六
ふ還里し。主家の泰否を詢んと
て。十餘年を経て來里しに。三郎兵
衛夫婦ハ。既ふ死し。其家破壊零落
して。見る蔭もやなく成りたりと。ぬ
ゐ女。一身を以て。艱苦の中ふ。幼主
を保育する。其志を感嘆し。故主乃
恩義ふ酬えんとて。己も其儘止り

て。ぬゐふ力を併せ。幼兒を鞠育し
たりし。か。遂に官ふ聞えて。神妙
の至り也とて。二人の者ふ。若干の
褒金と賜り。其行狀を。旌表せられ
しと云。

R115.1-153a-1

修身小學讀本卷之六終

修身小學讀本卷之六終

明治十五年五月六日版權免許

同年同月出版

同年十一月十一日再版御届

同年十二月出版

福井縣士族

纂述人 池田觀

大坂東區常盤町壹丁目
十番地寄留

岐阜縣平民

出版人 山岸彌平

大坂東區北濱貳丁目
五十五番地寄留

東崖堂

發兌人 富田彦次郎

東京京橋區桶町
壹番地



定價拾錢

